

「外国につながりを持つ子どもと保護者のための教育相談会 in みよし市」を開催しました! ▶

7月31日(日)にみよし市教育委員会と共催で、教育相談会を開催しました。この相談会は、外国につながりを持つ子どもが日本で進学・就職する上で必要な教育制度等の情報提供、日ごろの学習について相談する場で、今年度は3年ぶりに現地で開催することができ、7か国、33名の方々にご参加いただきました。

相談会は、日本語を含む7言語で開催し、みよし市教育委員会の深谷健次先生に、この地域で進学・就職する上で知っておくと良い入試制度や進路の選び方についてご講義いただきました。2023年度から公立高校の入試制度が変わることもあり、参加者の皆さんは真剣に深谷先生の話に耳を傾けていました。

その後の体験談発表では、NPO法人トルシーダ理事長の伊東浄江氏にご協力いただき、外国につながりを持つ現役の高校生と大学生から、実際の学校生活の様子や、受験に向けてどのようなことが必要か、合格した時の喜びなど、それぞれの経験からお話いただきました。参加者からは「日常の学校生活や入試の変更点等についての有益な情報が多く、勉強になった。」「これから受験する子どもたちの刺激やお手本になることを話してくれてよかった。」等の嬉しい声をいただくことができました。この相談会が、ご家族で将来の目標に向けて、今後の進路を考える良いきっかけになれば幸いです。



▲ 講義の様子



▲ 体験談発表の様子

海外研修参加報告 (シンガポール) 〈総務企画課 中村克成〉 ▶▶▶▶

8月19日から27日まで、(公財) 全国市町村研修財団が主催する研修「令和4年度自治体の海外戦略～活力あるアジアとの地域間交流促進～」に参加してきました。

研修の目的は、国内経済が活発で今後も発展すると考えられるシンガポールにおいて、政治・経済を見聞きして国際的な感覚を養うとともに、様々な視点から自治体の地域活性化につながる政策の立案と実行ができる能力を向上させることです。

今回のプログラムでは、まず国内でシンガポールの政治・経済・歴史等について学んだ後に、実際にシンガポールに行き、現地の政府機関や民間企業等を訪問し、活動について話を伺いました。

訪問した施設の中で特に印象的だったのが、「人民協会 (People's Association)」と「シティギャラリー」です。

人民協会とは、地域活動や次世代の地域社会の指導者の育成などを行う拠点として設置された法定機関です。

多民族国家であるシンガポールでは、外国人や新移民などが地域の住民と交流する機会を積極的に設けており、人民協会がその役割を担っています。

人民協会は、たくさんのコミュニティが活動できるよう巨大な複合施設(日本のショッピングモールくらい巨大です)を有しており、スポーツや文化活動といった様々な活動が行われています。日本では多文化共生の推進ということで様々な政策が図られていますが、シンガポールでは当たり前のことであるが故、このような施設ができたのではないかと思います。



▲ 人民協会の複合施設「Our Tampines Hub」

もう一つの「シティギャラリー」では都市政策を学びました。

シンガポールは国土が日本の淡路島くらいの割に人口が約550万人もいます。一軒家はほとんどなく、政策により建築された高層マンション(HDB)で人々は生活しています。

当然農業を営む土地もほとんどなく、水の確保も困難であることから、水をはじめほとんどの食物は海外からの輸入に頼っています。

このような状況でありながら、シンガポールが近代都市といわれ、豊かな国に育ったのは政府による効率的な都市計画があったということだと思います。

ただ、シンガポールも日本と同じく少子高齢化社会であり、今後はどのような政策で都市を存続させていくのかが気になります。



▲ シティギャラリーでの研修風景

今回の研修では、日本では学ぶことのできない貴重な経験を積むことができました。この経験を大いに参考としながら、私たちの協会の今後の施策に役立てていきます。

日本語ボランティアスキルアップ講座を開催しました ▶▶▶▶▶

7月19日、8月2日の2日間、日本語ボランティアスキルアップ講座を開催しました。今年はコロナ感染対策を取りながら対面で開催し、日本語ボランティアとして活動の間もない方から20年以上経験のある方まで延べ35名の方にご参加いただきました。

講師には、昨年度に引き続き、特定非営利活動法人 JASC 東海日本語習得支援チーム「コラージュ」のプロの日本語教師を迎え、昨年度のアンケートでもリクエストの多かった「助詞」をテーマに講義をしていただきました。

講座は、講義、練習プリント、グループワーク「クイズを作ろう」などで進められました。受講者同士、活動されている日本語教室での経験を話す場面も見られ、講師より、学習者から言いたいことを導くことが大切だとアドバイスをいただきました。

2日目のグループワーク「正しい使い方に導こう」では、助詞の誤用を正しい用法へ導くための方法をグループで話し合い、寸劇を創り、指導者役と学習者役になり全員の前で発表するなどの活動をしました。実践練習を通して、学習者自ら誤用を修正できるように支援する時のポイントをつかんだようでした。

受講者の方々からは、「教室に戻ったらボランティアに共有したい」「助詞の使い方の難しさを再認識した」「助詞の使い方を詳しく理解できた」とのお声をいただきました。

今回の講座に参加された方々が、活動している団体で、学んだことを活かし続けていただければと思います。



▲講座の様子

インターンシップ留学生報告 名古屋大学国際開発研究科 M1 龐 文昊 ▶

私は日中国交正常化50周年を迎える節目に国際交流の場を通して、より良い母国と日本の関係の構築を模索したいと思っています。また、留学生として、言葉と文化の壁といった在日外国人の抱えている問題を共感でき、多文化共生の重要性を痛感しています。そこで、語学力を活かすことによって中国と日本の相互理解を深め、多文化共生の社会づくりに取り組める良い機会だと判断したので、今回のインターンシップに応募しました。

インターンシップは5日間のスケジュールで行われ、仕事体験として日本語教室に関する運営状況の情報収集、図書コーナーでの文書作成、イベントの打ち合わせの参加、そして多文化ソーシャルワーカーとの意見交換など各事業の事務補助をしました。日本でのインターンシップは初めてだったので、最初は職場環境に慣れるかどうか、ちゃんと業務内容を理解した上で行動を取れるかが不安でした。その不安を拭い去ってくれたのはAIAの職員の方々でした。業務内容とスケジュールを丁寧に説明してくれてだけでなく、日本での就職活動に関する知識やキャリアを積む経験も教えてくださったので、私は国際交流と多文化共生の仕事への理解を深めることができました。何より、自分にもっと自信を持てるようになりました。

5日間の業務で特に感じたのは、「小異を残して大同を求める」ということです。「小異を捨てて大同につく」のように、ほんの少し異なる部分を消去すれば、大きな調和を保てると思われがちです。しかし、今回のインターンシップで県内の日本語教室の活動について話を聞いた時、外国人児童に日本語と日本文化を学習させながら、自国の文化や慣習の維持を心がけている点が非常に印象に残りました。

そこで、日本人と外国人が共存する社会には、日本文化への関心と理解を図りながら、外国人が持っている言語や文化の多様なバックグラウンドを尊重することが欠かせないと考えました。このように、お互いの違いを認めつつ、社会的包摂としての多文化共生を追求し続ける姿勢が大事だと感じました。

また、今回のインターンシップを通して、仕事をする時はコミュニケーションを取ることが重要だと気づきました。ほとんどの仕事は自分ひとりではなく、ほかの人と話し合いながらやり遂げたので、コミュニケーション能力は社会人にとって欠かせないことを学びました。

今後も勉学に勤しみ、コミュニケーション能力を高めながら、徐々に就職活動を始めます。また、語学力と異文化適応力を活かし中国と日本の相互理解を深めたいと思っています。



▲講座での活動の様子(左:龐 文昊さん)



▲イベントの打ち合わせ会議の様子

愛知県災害多言語支援センター設置運営訓練を実施しました ▶▶

9月4日（日）に愛知県、豊川市、その他関係団体と共同で、「愛知県災害多言語支援センター」の設置運営訓練を行いました。

愛知県災害多言語支援センターとは、大規模災害発生時に外国人に向けて情報提供を行ったり、直接外国人の支援にあたる市町村などに対して、翻訳の引き受けや通訳者の派遣などによる支援をするために、当協会と愛知県が共同で運営を行うセンターのことで、災害発生時の運営が適切にできるよう、定期的に訓練を実施しています。

幸いにもセンターを立ち上げなければいけないような自然災害は愛知県では起きていませんが、その反面で実際に災害が発生した時にスムーズに必要な支援を行うために、災害を想定した訓練が重要となります。

訓練当日は3つの班に分け、主に外国人に向けた情報発信、通訳やボランティアへの支援要請などの業務をシミュレーションしました。

訓練を行う中で、災害発生時に本当に外国人が必要とする情報を収集し、一刻でも早く発信することが重要だと感じました。

そのためにはこれまで以上に Web サイトや SNS を有効活用することが必要であり、また、いかにスムーズに情報を多言語化できるかが課題であると考えています。

防災担当者として積極的に研修に参加したり、実際に災害多言語支援センターを設置したことのある県の意見を聞いたりしながら、よりリアルな訓練ができるようにしていきたいと考えています。

※愛知県災害多言語支援センターの詳細はこちら（愛知県多文化共生推進室 HP）
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/saigaitagengo-center.html>



▲当日の訓練の様子

2022年度「外国人県民による多文化共生日本語スピーチコンテスト」が開催されました

愛知県では、外国人県民が自分の思いや考えを日本語で伝えようとする意識の高揚を図るとともに、多文化共生に対する県民の理解を促進するため、2015年度から、「多文化共生日本語スピーチコンテスト」を開催しており、8月20日（土）、今年度のコンテストの最終審査を実施し入賞者を決定しました。

応募資格は、愛知県に在学、在勤又は在住する小学生（相当年齢を含む）以上の母語が日本語以外の方です。今年度は、小学生の部 32名、中学生・高校生の部 24名、一般の部 23名、計 79名の応募があり、小学生の部 8名、中学生・高校生の部 6名、一般の部 6名の計 20名が一次審査を通過し、20名の内 18名が最終審査である本選に出場しました。

審査の結果、小学生の部では、知立市立知立東小学校4年 シノツカ コウタさんが、中学生・高校生の部では、名古屋市立大曾根中学校2年 バスネット ディビャさんが、一般の部では、星城大学経営学部経営学科2年 レゴック シュアンクインさんが最優秀賞を受賞し、大村秀章愛知県知事より表彰を受けました。

出場者からは、「日本で生活していく上で自信や勇気をもたらした。」「とても良い経験になった。」「また来年も参加したい。」などの声が聞かれました。このスピーチコンテストでの経験を大切にして、今後出場者のみなさんが、それぞれの学校や職場において、大いに活躍されることを心から願っています。



※集合写真撮影時のみ、マスクを外しています。